講演会　「子どもの虐待防止のために」
—アメリカの実践プログラムを通して—
講師　　あゆみの丘児童指導員
コモンセンスペアレンティングトレーナー　　松川和人氏

あゆみの丘は、大阪府南部、貝塚市の小高い丘の上、木々の緑に包まれた自然豊かな環境のなかにある児童福祉施設の一つ「情緒障害児短期治療施設」です
障害児施設ではなく、いろんな原因によって、自分に自信が持てなくなったり、人とうまく関わることができなくなってしまった子どもたち(幼児から高校生まで)のための施設です。

「コモンセンス・ペアレンティング」は、米国のボーイズタウン（90 年以上続く子ども達への援助機関）研究所で開発され、親（援助者）がどのように子どもと関われば良いのかという問いに、具体的なスキルを用いて効果を上げるプログラムです。　健全な子ども達はもちろんですが虐待された子ども達、発達障害の子ども達にも効果があると言われています。

＜コモンセンス・ペアレンティングが提案する６つのしつけ＞

１．具体的なコミュニケーション（わかりやすいコミュニケーション）
しつけ・・つまり”教える”ポイントは「具体的・描写的であること」です。
親（援助者）が言語化することで、子どもは何が良くて、何が悪くて、何を行ったら良いのかを理解できるようになります。
わかりやすいコミュニケーションとはスキルであり、プログラムの基礎となります。

２．良い結果・悪い結果
親（援助者）は、子どもの行動の後に結果（しつけ）を与えています。
ここではどのような「結果」が子どもの良い行動を伸ばし、不適応行動を減らすか考えます。悪い結果は罰として用いるのではなく、子どもが行った不適応行動について、適応行動の練習や一時的な悪い結果を用いることにより、次回から適応行動を選択する動機やきっかけを狙いとします。悪い結果は、出来るだけ事前に子どもと話し合い合意を得ていることが大切です。また大人側が、結果の大きさが適度なものか、年齢相応であるかをいつも考えるようにします。

３．効果的なほめ方
多くの親（援助者）は適応行動を見逃してしまいがちであり、
問題行動のみを取り扱う場面が多いことがあります。
問題行動の指導は、どちらかといえばネガティブな感情が流れることが多く、
これが多くなると子どもとの信頼関係構築が難しくなります。
問題行動の介入より、適応行動をほめて強化する方が作業として簡単です。
ここでは適応行動をほめて伸ばす方法を学びます。

４．予防的教育法（前もった言い聞かせ）

予防的教育法は、特に問題行動が多く見られる子ども達に有効です。問題行動を多発する子ども達の多くは、なぜ自分が問題行動を起こすか意識化できていないケースが多いと言われています。親（援助者）がその行動を分析し、適切な行動を示すことで問題行動を避けたり、減らしたり、解決出来る能力を高めたりする可能性を高めます。

問題行動が始まってからの介入は、それをパターンとして繰り返すことが多いのです。

５．問題行動を正す教育法

ここでは子どもの問題行動に対して怒鳴ったり、叩いたりする以外の方法で問題行動を止めさせるのと同時に、問題行動の代わりに取り得る行動を教え、練習します。

これにより子どもを叱るだけでなく、しつけの教育的効果を高める可能性が高まります。

６．自分をコントロールする教育法

子どもが感情的になり大人の指示に従えなくなる状況は、子どもが自分自身の感情のうねりにうまく対処できないことから生まれます。怒りややるせなさの感情を持つことは人として自然なことですし、理解できることです。しかし、その感情の扱い方を間違えると問題がエスカレートしたり、違った問題が発生する可能性が高まってしまいます。

こんな場合、まず大人が落ち着き、子どもが落ち着く方法を提示し、次に同じような状態になった時に感情をコントロールする方法を教え、練習します。

不適切行動をとった時にだけ「怒る」ということが多くなると、
子どもとの関係が悪くなり、子どもの不適切行動は増えていきます。

良好な関係を維持するグッドサイクルを学ぶことでで「怒る」ことが減り、しつけはぐっと楽になります。

＜グッドサイクル＞

｜→子どもの問題行動
｜　　↓
｜　肯定的なしつけ
｜　　↓
｜　親子関係が良くなる
｜　　↓
｜__子どもが言うことを聞くようになる

＜エスカレーションサイクル＞

｜→子どもの問題行動
｜　　↓
｜　強制的なしつけ
｜　　↓
｜　親子関係が悪くなる
｜　　↓
｜__子どもが言うことを聞いてくれない